私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

担任の役割に気付き教師としての責任を理解した

一人の教師によって数学の魅力に目覚めた高校生は、数学の教師として母校に戻り、新任の時から教科指導に熱心に取り組んだ。しかし、担当科目の指導だけが教師の役割ではない。生徒の進路実現を目指す担任の役割に気付いた時、教師の本当の責任を理解した。栃木県立宇都宮高校の大堀亮太先生が、その気付きを得た日々を振り返る。

栃木県立宇都宮高校 大堀亮太 OBORI RYOTA

中学時代、私は数学が苦手でした。そんな私に、数学の魅力を教えてくださったのが、入学した作新学院高校1年次の担任、松久武先生です。

松久先生の方針で、私の学年では毎朝、「早朝トレーニング」と題して数学の問題演習を実施していました。もちろん、数学嫌いの私には気の重い時間でした。2学期のある日、B5ノートを2ページ使って計算し、やっと解答できるような難問が出ました。ところが、松久先生の解説では、わずか2行の数式に整理されていたのです。しかも、使っているのは、私でも知っている公式。まさに衝撃でした。

それ以来、今まで分からなかった問題にも興味が湧きました。ただ、苦手科目の質問を直接するのはまだ気が引けます。そこで私は、松久先生が教室に置いていた質問用紙を利用しました。これは、出来るところまで式を立て、その先の解法を先生に教えてもらうというものです。その日のうちに返される質問用紙には、「キミが分かっていないのはここだよ」と教えるように、いつも詳しく解説されていました。

質問用紙でのやりとりを繰り返すうちに、分からない問題を考えるのが楽しくなりました。成績も上がり、数学教師を目指すようになったのです。

2000年度、私は数学教師として母校の門をくぐりました。松久先生は教科主任として数学科をまとめていました。その背中を見て私は、「一人でも多くの生徒に数学の魅力を伝えたい」と更に意気込んだのです。

当時、「早朝トレーニング」は全学年で行われており、私も作問を任されました。クラスの習熟度によって難易度や出題傾向を変えていても、一問も解けない生徒もいます。そんな生徒に、私は「うまく教えられなくてごめんな」と謝りました。松久先生のおかげで数学が出来るようになった私は、生徒が出来ないことは教師である自分の責任だと感じたのです。

どうしたら松久先生のように彼らを救うことが出来るだろう

先輩教師の言葉

教科指導以外の教師としての責任に気付かせたかった

作新学院高校教頭
MATSUHISA TAKESHI 松久武

私が大堀先生を担任していた頃、作新学院高校は数学科を中心にまとまり、生徒の力を伸ばすさまざまな取り組みをしていました。「早朝トレーニング」として問題演習を始めたのも、その一つです。少し背伸びをしてやっと解ける、そんな作問を心掛けていました。

生徒からの質問も多かったため、教室に質問用紙を置き、「これに質問を書いて提出してくれれば、解説して返すよ」と伝えました。空き時間で効率よく答えようとして始めたのですが、苦手な生徒にとっては直接質問せずに済むというメリットもあったようです。伸び悩む生徒からの質問も多く、四百枚が1か月でなくなりました。大堀先生は毎日、提出してくれました。

教師として母校に着任した大堀先生は、教科指導に率先して

か。考えた末、私は数学が苦手な生徒に声を掛け、早朝補習を始めました。教室ではなく職員室で、それも中央の最も大きなテーブルを使いました。「苦手であることを恥じるな。堂々と学ぼう」という思いだったのです。次第に希望者も参加するようになり、徐々に出席者数が増え、職員室に入りきらなくなって場所を教室に替えた時は、教師冥利に尽きる喜びでした。

担任になっても、私の意識は数学に集中していました。模試の成績でも、面談で注意するのは、数学ばかり。他科目の得点が低くても、「その科目の先生の責任だろう」と考えていたのです。

ところが、松久先生は違いました。私のクラスの成績を見て、「この科目は正答率の低い分野が共通している。指導する側に問題があるのは明らかだ。教科担当の先生に指導を見直してほしいと伝えなさい」と言うのです。一瞬、「新米が他教科の指導に口を出すなんて……」

とひるみました。すると先生は、「担任と他科目の担当教師が本気でぶつからなければ、生徒のための進路指導など出来ない！」と続けました。担任は、担当外の科目を含め、受け持ちの生徒のすべてに責任を負っている。松久先生は、生徒が希望する進路を実現させるという担任として最も大切な役目を教えてくださったのです。

振り返ってみれば、先生は、模試成績の推移から生徒の伸びしろをどう読み取るか、センター試験の結果から出願大をいかに決定するかなど、進路指導全般にも通じていました。私は、生徒の進路実現のために担任が全責任を負うという教師としての覚悟を学びました。

作新学院高校着任後、松久先生と過ごした5年間で、私は教師としての視野を大きく広げられました。この経験をほかの環境で生かしたいという思いもあり、教師になって6年目の05年度、公立高校に転じたのです。

現在勤務する宇都宮高校は赴任1年目です。全国有数の進学校で教える先輩方の指導力・作問力を目の当たりにすると、それなりに自信のあった教科指導について課題が次々と見えてきました。ただ、数学が苦手な生徒は、宇都宮高校にもいます。私は、彼らの「出来るようになりたい」という思いに応えたい。そして、生徒の志望実現のために、教師として出来ることすべてに尽力したい。それが松久先生に教えていただいた「教師の責任」だと思いますから。

撮影◎作新学院高校にて

右 まつひさ・たけし　数学科。作新学院高校勤務33年目。2010年度より、同校教頭。

左 おおぼり・りょうた　数学科。初任の作新学院高校に5年間勤務。その後公立高校に転じ、5年間の茂木高校勤務を経て、10年度より宇都宮高校の教壇に立つ。

取り組んでいました。会議ではよく独自の指導案を発表して先輩の先生と議論を白熱させ、負けん気の強かった高校時代の面影を感じたものです。ただ、教科指導に熱心なあまり、担任になっても、数学しか視野に入っていない様子が心配でした。

担任が責任を負うのは、生徒の進路についてです。志望の実現のためには、担当科目以外にも必要な知識は多くあります。生徒一人ひとりの他科目の模試成績状況もその一つです。大堀先生にそのことに気付いてほしかったからこそ、他教科担当の先生に指導改善をお願いするよう促したのです。相手は彼よりずっと年上のベテランでした。教師は誰もが生徒を伸ばしたいと考えています。それに、もともと作新学院高校には、学校全体で生徒を見るという精神がある。だから相手の先生も、きっと大堀先生に応えてくれるだろうと思っていました。実際、その先生は、自分の至らなさを反省し、補講という具体的な行動も起こしてくれましたから。

大堀先生が担任としての責任を理解し、さまざまな勉強を始めた時は、頼もしく感じたものです。思えば、私は大堀先生の担任に戻ったような気持ちだったのかもしれません。